



Title	ひきこもりの臨床心理学的研究 : 「生きる意味」という視点から
Author(s)	草野, 智洋
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59331
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【1】

氏 名	くさ の 野 智 洋
博士の専攻分野の名称	博 士（人間科学）
学 位 記 番 号	第 2 4 8 7 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 9 月 20 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	ひきこもりの臨床心理学的研究 ―「生きる意味」という視点から―
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 井村 修 (副査) 教 授 釘原 直樹 准教授 佐々木 淳

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、現代の日本において大きな社会問題となっているひきこもりという現象を「生きる意味」という視点から捉えなおし、より良い援助の方策を探ることを目的とした。本論文は4つの章から構成されており、以下に各章の内容を詳細に示す。

まず、第1章第1節では、ひきこもりという概念がいかにして生まれ、その後どのような変遷をたどり、現在どのように理解されているかを示した。ひきこもりと類似する概念は古くから対人恐怖やスチューデント・アパシーなどが存在している。現在のひきこもりの定義の難形となったのは、1998年の斎藤環による定義である。そこでは統合失調症やうつ病などの精神障害を第一の原因としないものが「社会的ひきこもり」として定義されていたが、2000年代後半になると、逆にひきこもり状態にある人の精神障害が見過ごされているという指摘がなされ始めた。一方で、若年就労問題の文脈から生まれたニートという概念が広まるにつれて、ひきこもりに対しても就労を目的とする支援が盛んに行われるようになった。このように、現状ではひきこもりを巡って「精神障害」と「就労」という二つの視点を軸に議論がなされている。しかし近年では、社会学の立場から、ひきこもりを実存や存在論との関連で語る言説が生まれている。これらの議論を踏まえ、本論文では「心の病気を治す」ことや「働けない人を働けるようにする」という視点ではなく、「意味のある人生を送る」という視点からのひきこもり支援の可能性を探る。

第1章第2節では、諸外国におけるひきこもりについて留学生を対象とした調査から考察した。それによると、韓国、中国、タイなどのアジアの国々では日本と同様にひきこもりが社会問題となることが示された。一方で、実際に身の回りにひきこもり状態の人が存在するかどうかについては、アジアとその他の地域で差は見られなかった。このことから、ひきこもりという現象がアジアでのみ見られるというよりも、現象が「社会問題」として共有されるあり方に、アジアと欧米で差があるという可能性が示唆された。欧米では、ひきこもりは「個人の生き方の問題」であるのに対して、家族や社会とのつながりの中で生きていくことを求められるアジアの国々では、ひきこもりは「社会問題」として問題化される。日本を含めたアジアの社会では、ひきこもりが個人の生き方の一種として許容され難いがゆえ、ひきこもる当事者の苦しみはより一層重いものになると推察される。

第2章では、大学生のひきこもりをテーマに論じた。第1節ではわが国における大学生のひきこもりに関する研究について概観した。大学生に相当する年齢でひきこもり始める人が多数存在するという調査結果が報告されているにもかかわらず、大学生のひきこもりに関する研究は十分には行われていない。その要因として、①80年代まで盛んに行われたスチューデント・アパシー研究と90年代以降に盛んになったひきこもり研究との間に連続性が見られないこと、②大学生は人格成長のためのモラトリアムを保証される時期であり、ひきこもりという状態

に他者が介入すべきなのか見守るべきなのか見解が一致していないこと、③大学の学生相談室の体制として自発的に来談しない学生にまで対応しきれないこと、などが挙げられた。

第2章第2節では、大学生に対する質問紙調査から、ひきこもり傾向の高い学生ほど自らの人生に意味や目的を見出していない傾向があることが示された。ひきこもり傾向の高い学生と低い学生との間で特に顕著な差が見られたのは、「主体性」「実存的充足」「自殺観」であった。つまり、ひきこもり傾向の高い学生はそうでない学生に比べて、①自らの人生に対して主体的に取り組んでいく意識が弱く、②自分の人生が空虚で意味の無いものだと感じており、③自殺を考える頻度が高かったり自殺に対して許容的であったりした。Frankl（1952）によれば、実存的な充足感とは人生に対する主体的な態度、即ち「自らの人生における責任を伴った決断の積み重ね」によって結果的に得られるものである。環境から何かが与えられることを期待するのではなく、自らが主体的に決断を行いその責任を引き受けていくような態度を涵養することが、人生を意味あるものにし、ひきこもりを予防することにもつながることが示唆された。

第3章第1節では、「生きる意味」というテーマを扱う心理療法であるロゴセラピーの理論について論じた。心理臨床場面においては、クライエントの「なぜ生きなければならないのか」や「人生の意味とは何か」といった生きる意味の問題にセラピストが向き合わなければならないことがある。そのような時に、心理療法やカウンセリングの技術的な側面の追求だけでは、その問題に向き合うことはできない。ロゴセラピーでは、人間が人生の意味を問うても答えは得られず、人生（状況）からの要請に対して人間が自らの良心に基づく決断によって行動することによって、人生は意味あるものになると考える。また、人生における価値として、①仕事や創造的な活動によって得られる創造価値、②自然や芸術や愛などの体験によって得られる体験価値、③変えることのできない状況に対してその苦悩をしっかりと引き受けることによって得られる態度価値、の三つを挙げ、どんなに絶望的に思われる状況においても生きることを意味が失われることは決してないと主張する。

第2節では、ロゴセラピーの実際の会話スタイルの特徴についてFranklの後継者であるLukasの著書から明らかにした。第一に、ロゴセラピーではクライエントの現在の姿だけでなく、まだ發揮されていなくても潜在的に備わっているであろうクライエントの「より肯定的な部分」に対して働きかける。第二に、セラピストはクライエントを解釈するのではなく、クライエントのことを理解するのを助けて欲しいというメッセージによって、事態を明確にする。第三に、クライエントの行動の選択肢の中で現実には選ばれなかったオルタナティブを取り上げて吟味することによって、クライエントに備わっている可能性を意識化する。最後に、クライエントの行っている行動の意味を探り、その意味を実現するためのより適切な行動は何かを検討する。しかし、これらの会話スタイルはあくまで一例であり、技法を教条的に用いるのではなく、ロゴセラピーの世界観や人間観に基づきそれぞれのセラピストが独自の会話スタイルを發展させていくことが望まれている。

第4章では、「生きる意味」という視点からのひきこもり支援の実際について論じた。第1節では、NP0などの援助機関を利用してひきこもり状態から回復した人へのインタビュー調査から、ひきこもりからの回復プロセスを明らかにした。ひきこもりからの回復は、自分自身の持つ「こうあらねばならない」といった規範意識や社会常識などへの「とらわれ」から解放されることによって起こる。援助者は「脱とらわれの人」としてひきこもり当事者に新しい生き方を示すモデルとなっており、援助機関は「失敗することのできる守られた場」として、ひきこもり当事者が自分を縛っていたとらわれから踏み出して新しい体験を重ねる場となっていた。ひきこもり状態から回復した後の彼らの考え方や生き方は、遠い先のことを考えて生きるのではなく「今・ここを生きる」という態度と「主体的に生きる」という態度へと変化していた。これは第3章第1節で示した人生を意味あるものにする生き方と共通する姿勢であった。

第2節では、かつてひきこもり状態であり、現在も対人関係に困難を抱える男性との面接過程を報告した。当初クライエントは、現在の生活がうまくいっていないことの原因は過去の家族との関係にあるとして、家族に対する不平や不満を口にすることが多かった。セラピストはクライエントの語りを否定することなく共感的に聞いていき、その中で、クライエントには人生を意味あるものにしたいという「意味への意志」が強く備わっていることに気づいた。結果の責任を負うのが怖いから決断ができないと語っていたクライエントに対して、セラピストはクライエントの「意味への意志」を刺激し、クライエントが自分の人生に責任を持ち、意味のある人生を送ることができるように援助した。次第にクライエントは「ポジティブな諦め」を獲得し、過去のことには「もう飽きた」と語るようになった。過去ではなく未来に目を向け「そこから先どこへ行こう」と自分の人生を自分の意

志で作り上げていく姿勢を見せるようになったクライアントは、就職を果たし、面接は終結した。ひきこもり状態から脱することを直接的に目指したわけではなく、意味のある生き方をしたいというクライアントの意識に焦点を当てることによって、結果的に就職し、ひきこもり状態からも脱出することができた事例である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、わが国において社会問題となっている、ひきこもりという現象を「生きる意味」という臨床心理学的視点から捉えなおし、援助の方策を探ることを目的とした。

第1章では、ひきこもりという概念について説明し、対人恐怖やスチューデント・アパシーとの関連を述べた。さらにひきこもりに対する「精神障害」と「就労」という二つの視点の議論を紹介した。また留学生を対象とした調査を実施し、韓国、中国、タイなどのアジアの国々ではひきこもりが社会問題となっていることが示された。一方で、身の回りにひきこもり状態の人が存在するかどうかについては、アジアとその他の地域で差は見られなかった。現象が「社会問題」として共有されるあり方に、アジアと欧米で差があるという可能性が示唆された。欧米では、ひきこもりは「個人の生き方の問題」ととらえられていた

第2章では、大学生に対する質問紙調査から、ひきこもり傾向の高い学生ほど自らの人生に意味や目的を見出していない傾向があることが示された。ひきこもり傾向の高い学生と低い学生との間で特に顕著な差が見られたのは、「主体性」「実存的充足」「自殺観」であった。つまり、ひきこもり傾向の高い学生はそうでない学生に比べて、①自らの人生に対して主体的に取り組んでいく意識が弱く、②自分の人生が空虚で意味の無いものだと感じており、③自殺を考える頻度が高かったり自殺に対して許容的であったりした。そしてこれらの結果をFranklに依拠しロゴセラピーの観点から論じた。

第3章では、「生きる意味」というテーマを扱う心理療法であるロゴセラピーの理論について論じた。Franklの後継者であるLukasに依拠し、ロゴセラピーで重要な以下の働きかけについて論じた。①潜在的に備わっている「より肯定的な部分」に対して働きかけること。②クライアントのメッセージによって事態を明確にすること。③クライアントの行動の選択されなかったオルタナティブを吟味し可能性を意識化させること。④クライアントの行っている行動の意味を探り、それを実現するための行動は何かを検討すること。

第4章では、「生きる意味」という視点からのひきこもり支援の実際について論じた。NP0などの援助機関を利用してひきこもり状態から回復した人へのインタビュー調査から、ひきこもりからの回復プロセスを明らかにした。ひきこもりからの回復は、自分自身の持つ「こうあらねばならない」といった規範意識への「とらわれ」から解放されることによって起こることを明らかにした。さらにかつてひきこもり状態であり、現在も対人関係に困難を抱える男性との面接過程を報告した。当初クライアントは、現在の生活がうまくいっていない原因は過去の家族との関係にあるとして、家族に対する不平や不満を口にするが多かった。セラピストはクライアントの語りを共感的に聞き、その中で、クライアントには人生を意味あるものにしたいという「意味への意志」が強く備わっていることに気づいた。クライアントは、就職を果たし面接は終結した。意味のある生き方をしたいという意識に焦点を当てることによって、ひきこもり状態からも脱出することができた事例である。

臨床心理学分野でのひきこもり研究は決して多くはない。本研究は理論的検討、国内外での調査、カウンセリング事例とこの問題を多角的に検討している。またロゴセラピーの観点からひきこもりの支援を論考したことも意義がある。よって本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値のあるものと認める。